

我々は現在、『学び合い』という新しい考えの基に教育実践を行い、それを研究している。残念ながら、学び合いという言葉は、我々以外の方々が色々場面で色々な意味で使われている。そのため、筆者らの『学び合い』が誤解される危険性がある。例えば、学び合いと題する書籍や研究発表会での実践は、基本的に一斉授業のスタイルである。ただ、授業の一部分に子ども同士の話し合いの時間を設けたものである。大抵の場合は「はい、皆さんで相談してください」と教師の指示の元で一定時間話し合いが行われるものであろう。しかし、筆者らの『学び合い』はそれらとは全く異なる。

もし、『学び合い』を定義するとしたならば、

『子どもたちは有能である』と確信し（逆に言えば教師の能力には限界があることを自覚し）、「学校教育は何を目指しているか？」ということを中心に問いながら、日々の教育（その多くは教科学習）においてそれを具現化する教育』と定義できる。

その姿は様々である。おおよその姿を算数の授業の様子で記載すると以下の通りである。

始業ベル

教師が教室に入る。

教師：今日は教科書56ページから65ページを、みんなで分かってください。どうぞ。

子ども達が立ち歩きながら相談する。

教師は、「へー」、「凄いねー」と声を上げるが、「あ、そこを繰り上がった

リレー連載

教育のゆくえ

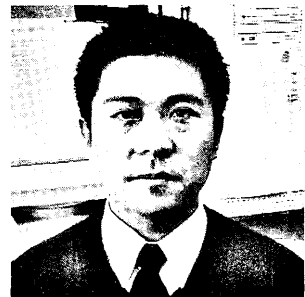
『学び合い』について

西川 純■

上越教育大学教授

jun@iamjun.com

<http://www.iamjun.com/>



て……」のような指導は全くしない。二コ二コと教室を回っている。これが授業の大多数の時間を占める。

あともう少しで終わりそうになる頃

教師…もうそろそろ終わりです。

子ども達は席に戻る。

終業ベル

教師が教室から出る。

つまり、教師は板書をしない、指導もしない、まとめもしない。全体に語るのは、ただ2回だけである。これが全ての授業、ずっと続くのである。けつして一斉学習の補完ではない。それで、成績が上がる、人間関係が良くなる、特別支援の子が気にならなくなる、そして教師の仕事が楽になり、楽しくなる。

おそらく、とても信じられないと思われる。しかし、小学生にも分かる単純な理屈で説明できる。子どもたちは授業中に様々な疑問をもつ。例えば、次は算数の学習場面で表れた子どもたちの会話である。

A…答えは24だと思っんだ。

周囲にいた児童…ええ違うよ。

B…A君の意見は、きつとこんな風で繰り上がった1と(10)の位の4を足さずに…

A…そうじゃないんだよ！わかんねえ！

B…次に、 4×6 をして24になったんだけど…

A…俺はそういうことじゃなくて…

《ここへCが加わる》

C…ばくはさ、ちがつてね、繰り上がった1をそのまま1の位に足していると思っんだ。

A…そうそう！それ！

C…それを足さないで(10の位だから、4と足して……)

A…そっか！分かった！足す場所が違ったんだ！

このような疑問をクラスの子どもの何人かもつたろうか？子どもを見取ることでできる教師であれば、クラスの殆どは何らかの疑問をもつことを知っているだろう。実際、筆者らは認知研究の結果、同じ誤解であっても一人一人の誤解の原因は違うことを明らかにしている。さらに、同じ正解であっても、多様性があることを明らかにしている。次に、一斉授業において子どもの疑問に対応する時間はどれだけだろうか？おそらく、5分程度である。さて上記を組み合わせて出される結論は、一人一人の疑問に教師が対応する時間は、5分÷クラス人数であり、おそらく、数十秒であることが「算数」で導き出される。明らかに、その時間で、「その子ども」の疑問が何であるかを特定し、その疑問に答える会話を成立させることは出来ない。逆に「その子ども」の疑問が何であるかを特定し、その疑問に答える会話を成立させるにはどれだけ必要だろうか？2分程度は必要である。従って、最大で3人程度しか対応することは出来ない。つまり、圧倒的大多数は疑問に答えてもらえない。さて、授業中の疑問に答えてもらえない場合、子どもはどうなるかを想像して欲しい。成績の中より下の子であれば、その段階で授業に参加することを放棄することは想像に難くない。従って、算数のレベルの計算と、簡単な論理において、一斉学習は効率の悪い学習であることが導き出される。多くの教師は、子どもの多様性を見くびっている。一方、多様な子どもたちに、同じことを言えば、「一斉に分からせられる」と教師の力を過大評価している。

一方、我々の『学び合い』では全く異なる。徹頭徹尾、子どもたちが学習に関して学び合っている。教室のそこかしこで話される学び合う時間を、ここで1分、あそこで30秒と計測し、それらを1時間45分間の算数で、全てを積算するとどれだけの時間になると想像されるであろうか？我々が計測した結果は、ごく初期段階でも20分を越えている。数ヶ月もたつと50分を超える場合もある。つまり、教師の二斉授業よりも遙かに多い時間を「個別指導」に費やしている。先の事例に示すように、子どもたちの「個別指導」はごくごく日常会話であり、常識のレベルにすぎない。しかし、思い出してほしい。我々教師が机間巡視をしながら個別指導している会話が、「〇〇理論」のような高尚な理論に裏打ちされて会話されているだろうか？明らかに否である。表現は大人の会話とはなっているが、ごくごく日常会話であり、常識のレベルにすぎない。つまり、子どもと同じなのである。しかし、先に述べたように、子どもは教師より遙かに多い時間を「個別指導」に費やすことが出来る。

さらに、次の事例を見て欲しい。これは小学校3年生の学習場面である。

A：わかんねえんだよ！
B：えっ？何が？
A：7×4、7×4だよ。
B：A君は7の段まだだもんね。逆にすればいいじゃん。4の段できるもんね。
A：あつーそーかー分かった。簡単じゃんー分かった。
B：A君、かけ算の九九、やった方がいいよ！
A：うん、そうだよね。ありがとう！

Aが「分からない」と言うと、Bは「Aはかけ算の4の段まではできて、7

の段はできない」という2年生の時の学習を思い出し、サポートした。日本の3年を担任している教師の中で、クラスの子どもの達の九九の習得状況をBレベルで覚えている教師はいたいどれほどいるだろうか？しかし、子どもたちの中には、それを覚えている子どもがおり、そして、子どもは、そのような子に聞きに行くのである。

最後に、付け加えると、クラス中で上記のような会話が入り乱れて成立しているクラスで、不登校等の問題が生じるだろうか？否である。『学び合い』は学力を含めた全人的な成長をバランス良く成立させることができる。

附記

本書の内容に関しては『勉強しなさい！』を言わない授業』（東洋館出版社）に書いている。そこでは実技教科の『学び合い』の姿、また、勉強の不得意な子から勉強の得意な子が教えてもらうことが、日常に成立する様子も記載した。また、本書で示した『学び合い』の授業の動画を筆者らのHP (<http://www.amjun.com/>)で配信している。しかし、お勧めは実際の授業を参観することである。参観すれば、筆者が書いていることが本当であり、実際はそれ以上であることが実感される。そして、本書で書かれている「信じられない」子どもの姿が、実は、自然な姿であることを分かることができる。筆者らの同志は、新潟（長岡、新潟）、山形、福島、群馬、埼玉、静岡、名古屋、岐阜、愛知、長野、鹿児島、沖縄にいる。その方々は、日常的に授業実践しているので、その学校の行事などの特別な事情がない限り、いつでも見せてくれる。ご希望があれば、ご紹介致します。どうぞ。